最優秀賞（京都府知事賞）

ふるさと北方領土

南丹市立園部中学校
三年　米谷　カヤ

みなさんが思い浮かべるふるさととは何ですか。「生まれた場所」「住んでいる所」と答える人が多いのではないでしょうか。でも、ふるさとは決してそんな単純なものではありません。

私は以前、沖縄に住んでいました。沖縄に住んでいた最初の頃は、「外から来た人」「ハーフ」「自分たちと一緒じゃない」そんな理由で、学校でみんなが仲間に入れてくれないことがありました。自分は外の人だから、みんなと馴染むことがあまりできませんでした。そんな時、私はとても自分が恥ずかしくなってしまいました。そんな私が、沖縄を自分のふるさとと呼べるようになったのは、「みんなが受け入れてくれた」「自分の居場所がある」と感じてからでした。

ふるさとは、単に生まれ育った場所ではなく、心の底から自分の居場所があると思える所、何があっても安心して帰ってこられる場所だと私は思います。でも、そんな大切なふるさとを奪われた人々や歴史が北方領土にはあります。

かつて、北方領土にはアイヌの人々が暮らしていました。彼らは厳しい自然環境の中、その自然と共存しながら独自の文化を発達させていました。しかし、本州から移住してきた和人に搾取され、文化を否定されました。また、第二次世界大戦が終わった後、北方領土で暮らしていた人々は、まさに全てを奪われました。突然、生活の場に踏み込んできたソ連兵によって、大切なものを奪われ、更に住んでいた土地から追い出されたのです。もうこの状態が七十年以上も続いています。他者からの圧迫により、安心して暮らせる場所を失ってしまった人々はどんな思いだったのでしょうか。

「奪われてしまった人々に、ふるさとを返す。」傷ついた人々の心を癒やすのは、この方法しかないと思います。かといって今島に住んでいるロシアの人々を追い出してしまったら、アイヌの人々や元島民がされたのと同じことを、その人々に繰り返してしまいます。だから、取り上げたり、追い出すのではなく、むしろ「開く」ことが必要だと私は考えています。

かつて、私は沖縄で「受け入れてもらえていない」と感じる悲しさを経験しました。これまでの自分を全否定されているように感じました。それを克服できたのは「自分の違いを恥ずかしがらず堂々と見せられた」からだと思います。そして、それを周囲の仲間は認めてくれたのです。自分を開いていくのは、とても勇気のいることです。そして、違いを認めていくことも同じぐらい勇気が必要です。しかし、お互いその壁を乗り越え、認め合うための第一歩を踏み出す。そうすれば北方領土は、アイヌの人も日本人も、ロシア人も共に暮らせる環境に変わり、誰のふるさとも奪わずにすむようになるのではないでしょうか。互いの文化を学び合うことで、もっと幅広い視点を持つ人が増えるのではないでしょうか。そんな誰にとっても安心な場所に北方領土がならないかと思います。

私は、これから他の人の意見を尊重し、周りの目に流されることなく自分を開き、正しいと思うことを発信していきたいです。そして、北方領土をふるさととする人たちみんなが「ここが私たちのふるさと」だと心から思える地になるまで、この問題について考え、行動していきます。

最優秀賞（京都市長賞）

島民の叫び

京都市立嵯峨中学校
二年　鵜飼　瑠璃子

今年の春、家族旅行で奄美大島に行ったときのことだった。私たちはソテツ生い茂る海岸沿いを車で走っていた。すると、「北方領土返還　国民の願い」という看板が目に飛び込んできた。

私は北海道に行ったことがある。そのときには、このような看板はあちらこちらにあった。しかし、北海道から二千五百km以上離れている奄美大島に、なぜ北方領土返還を訴える看板があるのだろうか。私は父に聞いてみた。

「沖縄や奄美大島は米国に統治され、苦労の末に返還された。当時、日本は米国と敵対するソ連に占領された北方領土の交渉どころではなかった。先に返還された奄美の人が北方領土の元島民に思いを寄せて看板を立てたのかもしれない。」などと話してくれた。

北方領土とは、過去一度も外国の領土になったことがない「日本固有の領土」だ。しかし、第二次世界大戦で日本が降伏した後、ソ連軍が北方領土に上陸し、占領した。四島に住んでいた住民は収容されたり、島から脱出したりした。戦後七十四年が経った今でも、まだ不法占拠が続いている。

奄美から戻ってきた私は元島民の方の声を聞きたくなり、北方領土問題対策協会のホームページにアクセスしてみた。すると元島民のインタビュー動画が四十四人分あった。私は、全ての動画を見た。そこでは元島民の声が、「証言」として記録されていた。彼らは戦争時の貧しい暮らしや島から脱出したときの様子を語っていた。

終戦時十五歳だった国後島出身の佐藤信子さんは、「もし返還されても、もう高齢だから戻れない。」と語った。当時十六歳だった択捉島出身の宮下健四郎さんは、「四島を一括して返還されなければ平和条約を結ぶ必要はないと思う。」と話していた。元島民たちの声を聞き、私は、「島から脱出した人はどれほど怖かったことか。」「島に残った人もソ連兵に何をされるか分からず、不安な日々を送っただろう。」などと考えた。

多くの元島民は、自分たちが元気なうちに日本に返してほしいと願っている。元島民の方の平均年齢は八十四歳を超えた。私は戦争が終わって七十四年も経つが、返還交渉があまり進んでいないことにもどかしさを感じる。

一方で、日本人とロシア人が北方領土で仲良く暮らせる方法はないのかとも思う。

仮に領土問題が解決したら、ロシア人島民はどうなるのだろうか。領土返還を日本人が願うことも大切だが、両国の人々が共生できるしくみを考えることも政治の役割だろう。

先日のニュースで北方領土へは、今年から一般人も旅行ができるようになったと報道していた。私もいつか実際に現地に行き、ロシア人と対話をして、日露の友好の橋渡しをしたいと強く思った。